

(成果報告書)

藤枝市における市街地に近接した小山を活用した藤枝ブランドの創生に関する研究

静岡産業大学 情報学部 小泉研究室：教員：小泉祐一郎、学生：増田寛也・濱田一稀・清水大輔・藤田風音・深澤宙樹・渡邊玲治・山本系斗

I 研究の目的・背景

藤枝市には市街地に近接して小山（以下「市街地近接の里山」という。）が存在しており、それらを地域の資源として活用することにより、藤枝市を持続可能な社会を目指す環境共生都市としてブランディングするための方策を提示することを目的とする。

II 研究の内容

本研究では、市街地近接の里山からモデルとなる地区を選定し、住民の利用と観光客の利用の両面から新たな活用の可能性を検討するとともに、単に里山の活用策を検討するだけでなく、既存の藤枝市のブランドイメージをさらに発展させるうえで有効と考えられる方策を県内外の先進事例も参考にしながら専門家等からのヒアリングを行い調査研究した。

III 研究の成果

1. 当初の計画

本研究が、藤枝市に存在する小山を活用した新たな魅力を創出する方策を提示することにより、藤枝ブランドの創生に向けた取組みを誘発し、定住人口の増加と交流人口の拡大の一助になることが期待できる。

2. 実際の内容 A（予定どおりの内容）

本研究では、市街地近接の里山の現状と活用策がポイントになるため、静岡産業大学周辺の里山を対象に現地調査を行い、市街地近接の里山の現状と課題を検討した。そして、市街地近接の里山の活用状況について調査するため、先進事例として、藤枝市の蓮華寺池公園、静岡県内の事例及び千葉県・神奈川県の実地調査を行い、里山活用の可能性を検討した。さらに、静岡地域学会に依頼して里山を活用した藤枝ブランドの創生の方向性について有識者の意見を伺った。これらの調査を行いながら教員と学生による検討を継続的に実施し、「3」に記載の成果を得ることができた。

A 調査・検討

(1) 藤枝市内の状況調査：現状と課題の検討

① 静岡産業大学周辺の里山の状況調査（6月～12月）

双子山遊歩道がハイキングコースとして設定されており、藤枝市の委託で草刈り（年間19万円）が行われているため歩きやすい。コンクリート舗装された農道もあり里山へのアクセスは容易である。農地は茶畑がほとんどであるが耕作放棄された農地があり、人の身長以上の高さになっている。農作業をしている人（静岡市丸子在住）にヒアリングしたところ知人の藤枝市青木の村越さんから農地を借りているとのことであった。早生のお茶が採れるとのこと。自分の農地までの途中の農道沿いの雑草（ススキ）の刈り取りが大変とのこと。山林では竹林が拡大しており将来的にはハイキングコースにまで達する勢いである。藤枝市立病院の裏山の健康づくりハイキングコース（現在は通行止め）では、竹林が遊歩道の一部にまで芽を出している。

静岡産業大学周辺の里山は、主として、お茶を中心とした農地及び山林の中を歩くハイキングコースとして利用されているが、利用のレベルは高くないため地域の資源として捉えれば他の活用の方法も検討する必要があること、いずれの利用方法においても維持管理を含めた検討が必要であることが整理できた。

② 蓮華寺池公園の調査

本研究は、蓮華寺池公園について提言するものではない。蓮華寺池公園という藤枝市の里山ブランドのランドマークの存在をベースにさらに藤枝市の里山ブランドを充実・発展していくために、藤枝市内の市街地近接の里山をどう活かしていくかを検討することが蓮華寺池公園を調査する目的である。公園内には、歴史・文化施設、藤、アジサイ等の季節の花の名所、池の景観と自然観察、山のハイキングコース・展望台、山の上の古墳、フィールド・アスレチック、長い滑り台、軽食施設があり、自然公園と都市公園の両方の機能を有しているほか、文化ゾーン、都市景観、藤枝市のランドマークとしての存在意義も有している。

蓮華寺池公園は、様々な機能を有する総合的な里山活用の先進事例である。藤枝市における市街地近接の里山を活用した藤枝の里山ブランドを創生するためには、蓮華寺池公園とは別のタイプのもの、すなわち特定の機能に特化した様々なタイプの里山を市内に創っていくことが効果的であると考えられる。このため、藤

枝市以外の地域における、特定の機能に特化した事例の調査を行うこととした。

(2) 磐田市、掛川市、菊川市、御前崎市における里山の活用事例の調査（7月～8月）（主な箇所のみ）

- ① 豊岡里山公園（磐田市）：ヒアリング対象 鈴木隆典さん（磐田市敷地852番地在住090-1780-9714）
2軒の農家の土地、2万㎡のうち、1軒分が後継者がなく、竹林になってしまったので、借りて、竹林を切って、アジサイ等の花を植えた。8年前から4年間かけて整備し、4年前にオープンした。アマチュア無線の仲間で、山が好きで山菜取りをしていたグループの有志でやっている。中心は、地元の鈴木さん。豊岡東小学校も統合となり、地域の活性化に役立つように、取り組んでいる。5人でやっている。タケは、土とすれすれで切って、年4回くらい芽を切っていれば、自然と枯れてくる。3000円で会員になると、花桃の記念植樹と、干し柿の体験ができてカキがもらえる。四季の花の季節には地元の幼稚園児なども訪れている。
- ② 掛川市森林果樹公園：ヒアリング対象：遠鉄アシスト株式会社 兼堀行男氏（果樹管理指導員）
当初は市が直営であったがシルバー人材センターに1360万円で指定管理に。3年間を2期やったところで再公募になり、遠鉄が受けた。350万円の果樹の販売は市に納める。樹木の選定等で出たものを破砕機でチップにしたところ、カブトムシが来て卵を産むので、昆虫の施設をつくった。カブトムシの幼虫がチップを食べて土にすると、野菜がよく育つとのこと。公園の現地事務所の人材が充実している。
- ③ ブルーベリー小笠（菊川市）：ヒアリング対象：株式会社ブルーベリーオガサ 西下まりこさん
1987前に鉄工所経営者の妻の西下はつ代さんがブルーベリーの栽培を始めた。山林を自分で開墾した。ブルーベリー狩りとブルーベリーの販売をしている。農地を所有できない非農家による新たな農地の開墾と観光農園経営として注目されてきた事例。民間企業による観光農園で里山が活用されている。
- ④ 高松公園（御前崎市）
高松神社に隣接する小山を旧浜岡町が公園として整備したもの。東屋や木製のフィールド・アスレチックを解体・撤去していた。長い滑り台は、子どもたちに利用されている。パターゴルフも有料でできる。有料のパターゴルフがあるため公園内に事務所があり、子どもも安心して遊ぶことができる。

(3) 千葉県の事例調査 8月27日（火）～29日（木）

- ① 清水公園調査（千葉県野田市清水）
ヒアリング対象者 株式会社千秋社 清水公園副園長 西山直己氏、清水公園総務課係長 竹本雄子氏
明治27年4月、キッコーマンの経営者が市民のための公園を建設し、開放したことが始まり。昭和62年の年間98万人の入場者が最高記録（巨大迷路がオープン）。近年は、有料入場者は60万人。うち、フィールド・アスレチック30万人、バーベキュー&キャンプ15万人、ポニー牧場5万人。その他10万人。3月中旬から11月中旬が繁忙期。ただし、バーベキュー&キャンプは年間。従業員は60名。主に、施設の運営をしている。駐車場は1200台。有料。3時間以上800円。利用者の交通手段は通常は8割が車。主な客層はフィールド・アスレチックは一番は小学校高学年と親のファミリー。中学生、高校生のグループもくる。バーベキュー&キャンプは大人だけのグループが多い。運営上の工夫としては、施設の維持管理、メンテナンスを自社の社員でできるようにしている。毎週、打音検査。入場者数、料金から算出すると、入場料収入だけで4億円。
- ② あげぼの山農業公園調査（千葉県柏市布施）
ヒアリング対象者 一般社団法人柏市まちづくり公社現地スタッフ（非常勤職員）
平成4年に市民農園が開園し、平成6年に農業公園として開園した。農業研修センターを農業公園として観光利用もできるようにリニューアルしたもの。現在は、まちづくり公社と造園会社が指定管理者となっている。農業公園地区（5.5ha）内には、梅園、加工実習施設、ツバキ園、バーベキュー施設などがある。バーベキュー施設は、民間企業がテナントで入って予約制で利用できる。体験農園地区（11.7ha）は、地元の農家が、ふるさと農園営農組合（農地の地主）を結成し、市から委託を受けて運営している。市民農園2.3ha、お花畑の「ふれあい農園」2.2ha、農地の真ん中に市の施設である「風車広場」があり売店もある。
- ③ 大草谷津田いきものの里調査（千葉県千葉市若葉区大草町）
大草谷津田いきものの里は、千葉市が多様な生態系や景観を保全することを第一目的として、地主の協力を得て協定を結んで、地元の地主や住民が結成した「大草谷津田いきものの里管理組合」に市が管理を委託している。現地には、トイレ、倉庫、簡単な事務所があるが、人は常駐していない。市民はもとより、誰でも自由に入ることができる。無料駐車場もある。

(4) 静岡地域学会の有識者ヒアリング

9月27日（金）18時～20時、静岡市産学交流センター小会議室2。西原純静岡大学名誉教授、日詰一幸静岡大学人文社会科学部教授、金川幸司静岡県立大学経営情報学部教授、土屋和男常葉大学造形学部教授、畑隆常葉大学経営学部教授、小嶋良之地域づくりサポートネット理事（藤枝市在住）。
里山を地域の資源として活用して藤枝市の地域ブランドの創生に結びつけることは、里山の保全という現状維持にとどまらず、地域の将来像を新たに形成していくという意義を有している。藤枝市は、お茶、ミカ

ン、しいたけの産地として知られており、これらは、里山の存在がベースになっている。里山の風景とセットでお茶、ミカン、しいたけをPRすることで、自然の豊かさと食のイメージが結びつき、「藤枝里山フーズ」といったブランドを形成して、関連する加工食品も含めて、パッケージして情報発信することが考えられる。里山を「健康」のイメージでハイキングとセットで売る出すことが考えられる。藤枝市は、フジの花のイメージがある。蓮華寺池公園はフジの名所として知られている。棚まで整備しなくとも、フジが自生している山もある。長期的な視点でフジが見えるところを計画的に増やしていくことで、フジのまち「藤枝」のブランドが強化できる。

(5) 神奈川県事例調査 12月20日(金)～21日(土)

① 神奈川県立茅ヶ崎里山公園 (神奈川県茅ヶ崎市芹沢)

ヒアリング (公財)神奈川県公園協会茅ヶ崎里山公園 西川裕士副園長、利活用担当 西村弥生氏
 平成13年開園。35ha。1996年に「神奈川県広域緑地計画」が策定され、新たに8公園の整備の方針が示された。その一つがこの公園である。年間の来場者は、2018年が105,710人。年間の繁忙期は春と秋。夏と冬は少ない。ゴールデン・ウィークが最多。保全エリアは入れないので木陰が少ない。土日の利用が多く平日は少ない。バーベキューは木曜日の利用が少ない。駐車場は487台。有料300円、大型車1000円。公園利用者の9割が自家用車。主な客層は2極分化し一つは高齢者、もう一つは幼児を連れた30台の親子。年間の運営経費は指定管理料として、毎年1億1千3百万円。駐車場の料金収入が1千2百万円、自動販売機の収入が290万円ある。収支では、35万円の黒字である。ボランティア団体の里山公園クラブがあり、400人がメンバー登録。開園当時は1,000人が登録していた。指定管理者がクラブの事務局をしている。活動はクラブが自主的に決め、指定管理者と毎年、活動内容について協定を締結。ボランティア団体の事務局を指定管理者がしているのは、一般の人が個人的な活動ができないので、会員として登録することで活動が可能になるため。様々な活動ができることが会員になった人の喜びになっている。水曜日と土曜日を定例活動日。

② 川崎市立生田緑地 (川崎市多摩区枳形)

ヒアリング 生田緑地日比谷花壇・日比谷アメニス・東急ファシリティサービス共同事業体
 総括責任者 鈴木和久氏、緑地管理業務責任者 遠藤岳生氏
 昭和16年、向ヶ丘遊園を含む面積165haを川崎市都市計画緑地第1号として都市計画決定。昭和42年、市立日本民家園が開業。その後、各種の市立ミュージアムが開業。元々は、山林と農地であった。年間利用者798,000人。多い月は、桜の4月、紅葉の10月、11月。少ない月は2月と8月。多い曜日は土日。少ない曜日は月曜日。多い連休はゴールデン・ウィーク。利用者は家族利用と学校利用が多く、小学生以下、30代～40代が多い。中高生と70歳代は少ない。川崎市内と東京都の利用が多い。車が47%。電車30%。東口165台(うち4台が身障者用)、西口52台(うち2台が身障者用)大型バス4台。ボランティア団体;日本民家園の古民家を管理する団体として「炉端の会」がある。古民家は茅葺のため、防虫のために定期的に囲炉裏で燻す必要があり、火の管理をする人が必要である。炉端の会は現在280名が会員となっている。川崎市のバックアップがあり、市の研修を受けた人が会員となっている。一つのことだけでなく、案内をはじめ様々な活動をしている。9時30分にビジターセンターで朝礼を行っている。

3. 実績・成果

藤枝市の地域ブランドの創生に向けて市街地近接の里山を活用していくためには、蓮華寺池公園のような機能を有する大規模なものとは別に、特定の機能に特化した里山を市内の随所に形成していくことが有効である。その場合、里山利用者の年齢と里山の高低差の関係を考慮して図1に示したような類型を行い、既存の利用方法(図1の青字)に加え、新たな利用方法(図1の赤字)も検討していく必要がある。

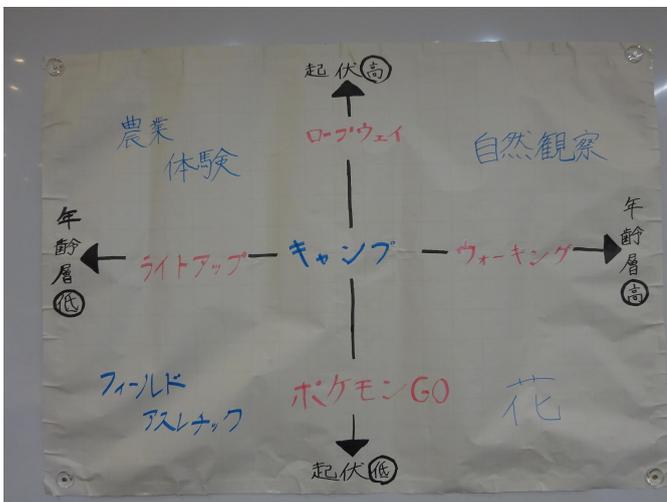


図1 里山の利用形態 (年齢層と起伏の関係)



図2 調査した里山の事例

また、里山の規模に応じて、小規模(住民有志の団体等)、中規模(中小企業、農業法人等)、大規模(自治体・

大企業)が里山活用の中心的な主体となると考えられ、土地の所有者と里山活用の主体をマッチングさせるための出会いの場やコーディネートする人材が必要である。そして、様々な人が里山の活動に参加できるよう、里山活用講座のような研修を行い、里山倶楽部として登録していく仕組みも有効であると考えられる。さらに、市内の既存の農林産物、料理、菓子、里山体験型観光、民泊などを「藤枝里山ブランド」という統一コンセプトで売り出しことでブランドの形成が期待できる。

4. 今後の改善点や対策

今後は、里山の地元の関係者と意見交換を行い、地域の意向を踏まえた案を作成していく必要がある。

IV. 地域への提言（藤枝市への政策提言を含む）

①蓮華寺池公園のような多機能・大規模なものとは別に、特定の機能に特化した里山の活用を随所につくる。

②特定の機能は、土地の高低差と利用者の主な年齢層の関係を考慮する必要がある。

③里山の所有者と里山の活用主体との出会いの場やコーディネートする人材が必要である。

④里山活用講座のような研修を行い、里山の活用に主体的に参加する人材バンク・ネットワークをつくる。

⑤「藤枝里山ブランド」という統一のコンセプトで農林産物、料理、菓子、里山体験観光、民泊等を売り出す。

V. 地域からの評価

11月2日(土)に地域イベント「お茶の香ロード」において中間発表を行い来場者には研究内容に興味を持っていただいた。3月27日に大学主催のフォーラム（補助対象外）で地域の関係者ら評価をいただく予定。

VI. まとめ

藤枝市には市街地に近接した里山が存在しており、お茶、みかん、しいたけ等の特産品も里山をベースとしている。蓮華寺池公園は里山ブランドのシンボルとなりうる。蓮華寺池公園のような多機能なものとは別に、特定のテーマに特化したものを随所に創っていき、農林産物、菓子、料理、里山体験観光、民泊などを「藤枝里山ブランド」という統一コンセプトで売り出すことで、藤枝らしさを生かした新たなブランドの形成が期待できる。